



TITLE:

書評: Nuria Yáñez-Bouza, Grammar, Rhetoric and Usage in English: Preposition Placement 1500-1900: Cambridge University Press, 2015 xvii + 373 pp.

AUTHOR(S):

家入, 葉子

---

CITATION:

家入, 葉子. 書評: Nuria Yáñez-Bouza, Grammar, Rhetoric and Usage in English: Preposition Placement 1500-1900: Cambridge University Press, 2015 xvii + 373 pp.. 近代英語研究 2018, 34: 61-66

ISSUE DATE:

2018-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/243343>

RIGHT:

発行元の許可を得て掲載しています。

近代英語研究  
(STUDIES IN MODERN ENGLISH)  
No. 34 (July 2018)  
pp. 61 – 66

Nuria Yáñez-Bouza  
*Grammar, Rhetoric and Usage in English: Preposition  
Placement 1500–1900*  
Cambridge University Press 2015, xvii + 373 pp.

家入 葉子

『近代英語研究』第34号(2018), pp.61 - 66

## 書 評

Nuria Yáñez-Bouza  
*Grammar, Rhetoric and Usage in English: Preposition  
Placement 1500–1900*  
Cambridge University Press 2015, xvii + 373 pp.

本書は、タイトルが示す通り、1500～1900年の英語を対象に、前置詞の位置、特に **preposition stranding** (P-stranding) を取り上げ、当時の文法、レトリック、および実際の言語使用をめぐる議論を展開したものである。18世紀を中心にその前後の時代も含めて、当時の文法家による P-stranding の扱いを詳細に分析し、一方で Helsinki Corpus (初期近代英語のみ) と Archer Corpus (イギリス英語のみ) を使って、P-stranding の実際の生起状況を調査する、という二つの異なるアプローチを組み合わせた構成になっている。過去の文法記述を大量に、そして総合的に扱う手法の背景には、Eighteenth Century Collections Online のようなデータベースの存在があり、その意味で、本書は今日的な研究成果であるといえる。多数の文法家の記述を比較することで、特定の文法家の記述が次々にコピーされて繰り返された事実も明らかになり、時代を特徴づける考え方がどのように形成され、継承されていくか、という広い視野から、英文法史全体を眺めることに成功している。

言語分析においても、データベースの威力は大きい。この場合のデータベースはコーパスであるが、その利用によって初めて、400年間という長期を一度に扱うことが可能になる。コーパスが普及する以前は、特定の時代や作家を扱う研究が一般的であったが、今日では、英語史の最大の面白さともいえる「変化」に正面から取り組むことが可能になった。本書は、この点でも今日的な取り組みの一例である。

以上を踏まえた上で、さらに本書が今日的であるのは、この二点を一冊の著書で同時に扱った点である。この手法は、規範文法に関心をもつ研究者が、近年好んで用いるものである。たとえば Ingrid Tieken-Boon van Ostade は、規範文法家の一人である Robert Lowth に関心をもち、そ

## 書 評

の文法記述だけでなく、Lowth 自身の言語使用も分析した(cf. Tiekens-Boon van Ostade 2011)。もっとも本書の場合は、その関心が向かう方向は、どちらかといえば英文法史の方のようである。

本書は、前後の付録部分を除くと、以下の章から成る。

- 1 Introduction (pp. 1-23)
- 2 Methodology (pp. 24-55)
- 3 Eighteenth-century precept (pp. 56-105)
- 4 Usage in Early and Late Modern English (pp. 106-152)
- 5 Grammar, rhetoric and style (pp. 153-283)
- 6 Latent awareness (pp. 284-303)
- 7 Conclusion (pp. 304-310)

当時の言語の分析は、第4章の47頁のみであり、著者の関心が言語分析よりも英文法史(第3章、第5章、第6章)に向けられていることは明らかである。第4章が英文法史についての記述を分断する構成は、本書を若干読みにくいものになっている。

本書をさらに詳しくみると、まず第1章は P-stranding の定義に始まる。一般に P-stranding といえば、いわゆる pied-piping と対比される関係代名詞構文(e.g. “The evening course which I referred to earlier is no longer available,” p. 4)が想起されるが、本書で扱う P-stranding は幅広く、たとえば感嘆文中のもの(e.g. “What a mess he has got himself into!” p. 4)や不定詞句のもの(e.g. “I have no friends to rely on,” p. 4)なども含む。

第1章の後半では、言語の標準化について、Haugen (1972)のモデルと Milroy & Milroy (1985)のモデルが紹介され、本書が後者を採用すること、歴史社会言語学の考え方が重要なテーマの一つであることが述べられる。ただし、Milroy & Milroy (1985)のモデルが本書全体を貫いているかという点でそうでもなく、歴史社会言語学についても、どちらかといえば広い意味で社会を意識しながら議論を進めたという印象が強い。実際、第1章では、本書が扱わないことも列挙されているが、その一つが P-stranding にかかわる社会的要因、たとえば社会階層、性別、年齢である。他にも本書が扱わないこととして、言語学的要因、たとえば前置詞の性

## 書 評

質や節のタイプ等があげられる。コーパスを用いた本格的な調査をしながら、全般的な頻度の提示だけに終わるのは、言語学的関心をもつ評者には、もったいないと感じられた。

第2章の **Methodology** は、2.1 **Precept data sources** と 2.2 **Usage corpus** から成り、それぞれについて資料の観点から記述がなされている。**Precept data sources** では、文法書の出版が18世紀の後半以降に急増すること、そのうちの一定数がリプリントであること、文法書を記述した人々には教育者や聖職者がいたことなどが解説される。**Usage corpus** は、使用した **Helsinki Corpus** と **Archer Corpus** への言及に始まるが、むしろそのあとに続くさまざまな前置詞構文の解説に重点が置かれているという印象が強い。本書が扱わない構文についても説明が詳しいため、読者にとってはやや焦点がぼやける感が否めない。

これらの章を踏まえ、第3章からが本書の中心的な議論となる。まず第3章の **Eighteenth-century precept** では、18世紀でも前半は文法現象に対する中立的な記述が多く、必ずしも規範的とは限らないこと、18世紀後半になると規範性が高まること、また文法書の出版点数そのものが急増することなどが明らかにされる。この章にも、若干の焦点の拡散があると感じるのは、第3章は **Eighteenth-century precept** と題されているながら、3.4節の **Nineteenth-century context** を含み、19世紀文法書の記述も詳しい点である。初めから、19世紀を視野に入れた章の組み立てを構想してもよかったかもしれない。

第4章は、コーパスを使った言語分析である。4.1 **Preposition placement and clause types**, 4.2 **Diachronic trends**, 4.3 **Register variation** と **Concluding remarks** から成り、このうち英文法における規範との関係で最も興味深いのは、4.2節である。**P-stranding** の頻度が16世紀から18世紀の前半にかけて上昇したのち、規範性が高まった18世紀の後半に一旦減少し、19世紀に入ると再び上昇するという結果は、文法記述と言語実態の連動の可能性を示唆する。ただし、規範的記述が **P-stranding** の減少の原因となるためには、両者の間に多少の時間差があるべきとの観点から、両者の間に因果関係を認めるところまではいかない、というのが著者の解釈である。とはいえ、18世紀後半という時代が文法記述についても、**P-stranding** の実際の生起状況からも特筆すべき時代であることは、

## 書 評

読者としてはやはり興味深い。

一方、4.1 節と 4.3 節は、1500 ～ 1900 年という 400 年間を扱いながら、議論が同時代的でありすぎる感を否めない。4.1 節は、400 年間のデータを一括して扱い、受動構文や zero 関係代名詞構文、wh 関係代名詞構文、不定詞構文で P-stranding の生起数が多いとする。P-stranding にかかわらず、これらの構文自体の頻度が 400 年間に変動していないか、気になるところである。同様に 400 年一括でレジスターによる違いを分析した 4.3 節についても、結果の解釈において、一層の注意を要すると感じる。レジスターの特徴は、時代とともに確実に変化すると考えられるからである。

第 5 章と第 6 章は、再び英文法史の議論に戻る。ただし、すでに英文法史を扱った第 3 章がどちらかといえば量的分析であったのに対して、第 5 章と第 6 章は質的に、関連の文法書や著者をあげながら、その特徴を記述していくという手法を取る。第 5 章は 130 頁ほどの紙幅を割いていることからわかるように、著者が最も力を入れた部分であろう。一方、第 6 章は 20 頁弱と少ない。ただし、第 6 章の重要度が低いかといえば、必ずしもそうではなく、第 5 章と第 6 章の内容は連続的であり、第 5 章の分量を調節するために便宜的に分割されているのではないかと、この印象を評者は受けた。したがってここでは、まとめて論じることにする。

第 5 章と第 6 章は内容面でも重なる部分が多い。Latent awareness と題された第 6 章では、John Dryden, Joseph Addison, Elizabeth Montague などの個別の著者が取り上げられ、規範性への意識が 18 世紀の後半に明らかになる以前から潜在的に存在していたとするが、Grammar, rhetoric and style と題された第 5 章においても、17 世紀文法における規範性についての記述は詳しく、Dryden にもかなりの紙幅が割かれている。

本書のこの部分での特徴は、文体やレトリックの考え方に注目した点であろう。18 世紀文法といえば、文法上の「正しさ」という視点が強調される。しかしながら著者の主張は、P-stranding を可とするか不可とするかの背景には文体の問題や、丁寧さや礼儀正しさについての考え方があり、それが結果として異なる文法観につながっている場合も少なくないというものである。Lowth(規範的)と Joseph Priestley(記述的)の違いは、文法の違いではなく、態度(attitude)の違いであるなどの指摘は、先行

## 書 評

研究に示唆を得た議論ではあるが、興味深い。また Dryden についても、すでに先行研究でも指摘されている **self-correction** (ここでは、自らの文章を改訂する際に **P-stranding** を別の構文に変更したこと) をさらに掘り下げ、Dryden の言語意識と関連づけながら議論が進められる。規範文法の背景に、一般に指摘されるラテン語の影響だけではなく、文体やレトリックの問題があるという著者の主張には、説得力がある。

一方で、著者が “The role of rhetoric ... has not been largely overlooked in the history of eighteenth-century prescriptivism” (p. 236) と述べるように、レトリックを視野に入れた議論がこれまでほとんどなかったかといえ、必ずしもそうではない。レトリックという用語を前面に出さない場合でも、著者が述べる **reason, propriety, decorum, politeness** などへの気づきは、多くの先行研究で扱われているところである。また、文法の規範性が 18 世紀後半よりも早い時期から潜在的に存在していたことが第 5 章と第 6 章で述べられるが、この記述が前半にくるような本の構成であったなら、18 世紀後半に **P-stranding** が減少した事実 (第 4 章参照) の解釈も変わったかもしれないと感じた。

最後に、技術的なミスは少ない。やや気になる校正漏れは、p. 146 のグラフの 1800-1749 (正しくは、1800-1849) ぐらいだろうか。また、Hernández-Campoy & Conde-Silvestre (2012) は、一貫して、Conde-Silvestre & Hernández-Campoy (2012) (著者順が逆) となっている。その他で気になったところは、グラフの多くで **normalised figures** とだけ書かれているが、これが 10,000 語あたりの頻度であることがわかるのは、本書の半ばである。

以上、本書の内容を追いながら、その特徴をあげてみた。全体としては、扱う内容が多様かつ膨大であるため、また **P-stranding** 以外の現象への言及も多いため、もう少し整理整頓が欲しいと感じる。1500 ~ 1900 年という時代の幅は広い。英文法史だけでも膨大であるが、言語変化も大きい。扱いにおいては、歴史やレトリックなど多様な視点が盛り込まれている。これらの情報が、次々に提供されるため、読者は場合によっては押しつぶされそうになるかもしれない。しかし、労作であることは間違いない。また本書の書評を書いた Ebner (2016) がその結論部分で “an important piece to the socio-historical study of effects of prescriptivism on

書 評

actual language use”と述べるように、この分野の研究に際しては、必読の著書となることも確実である。

注

- \* 匿名の編集委員の方々から、既刊の書評に関する情報など、たいへん貴重なご助言をいただきました。ここに謝意を表します。

参考文献

- Ebner, Carmen (2016) “Review: Historical Ling; Socioling; Syntax: Yáñez-Bouza (2014),” *The Linguist List* 27.1498, 31 March 2016. <<https://linguistlist.org/issues/27/27-1498.html>>
- Haugen, Einar (1972) *The Ecology of Language: Essays*, Stanford University Press, Stanford.
- Hernández-Campoy, Juan Manuel & Juan Camilo Conde-Silvestre (eds.) (2012) *The Handbook of Historical Sociolinguistics*, Wiley-Blackwell, Malden.
- Milroy, James & Lesley Milroy (1985) *Authority in Language: Investigating Language Prescription and Standardisation*, Routledge and Kegan Paul, London.
- Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2011) *The Bishop's Grammar: Robert Lowth and the Rise of Prescriptivism*, Oxford University Press, Oxford.

家入 葉子 (京都大学)  
[yiyeiri@bun.kyoto-u.ac.jp]